

大いなる肯定の哲学

平井邦男

1

あらゆる学はその根源に一つの問題を内包している。我々の知的営為は、問うという行為があってはじめて発動する。問いが発せられて探求が始まり、探求の結果として様々な知識が蓄積される。こうして一つの問題が形成され、学が成立するのである。

2

人間には問いを提出することができるが、機械にはできない。それが人間と機械の本質的な相違である。コンピュータの発明以来、我々は、計算したり、問題を解いたりする機械の存在を知っている。しかし、機械には問題は解けても、問題そのものを作ること、即ち、問いを提出する能力がない。人間だけが、問いを発することができるのである。

3

問いとは何か？ 問いは欲求の延長である。そして行動の一手手前である。人間の欲求が現実の壁と衝突した時に、問いが発せられる。それ故、問いの発生には二つの条件が必要である。即ち、欲求の確定とその実現をはばむ何らかの障害と。

大いなる肯定の哲学

4

さて、哲学においても事態は同じであろうか？ 哲学的問いというものが存在するのだろうか？ それは、一体どのような欲求の延長なのか？ このように問えば、哲学的問いの特殊性が浮び上ってくる。哲学的問いは確かに存在する。しかし、この哲学的問いは他の問いのように欲求の延長ではなく、いわば欲求の自己矛盾、欲求の葛藤から生れるのだ。つまり、哲学的問いは欲求が確定されないことから発生する。

5

我々は人間を行為者としてとらえる。人間は外界の動きに反応し、また自らの内的欲求に従って活動する。人間は内的にたえず変化しながら、同時に、ある一定の安定な恒常性を維持する存在である。人間の特性はその行動性に現われる。

生命のない無機の物質は外からの作用に対して反応するが、それ自身の内部からは動き出さない。即ち、無機物は、大ざっぱに言って、内部変化のない静的な物質構造を持っている。

これに反して、生命ある物質は、常に代謝作用を行っており、生体は入力エネルギーと出力エネルギーの流れの中心である。生体は、いわば川の流れのようなものである。或は、水の入る入口と出ていく出口とを持った池のようなものである。一方でどんどんエネルギーを受け取りながら、他方でエネルギーを放出している。つまり、熱力学でいう開放系という動的構造を有しているのである。たえまなく化学変化を起しなから、全体としては、一定の幅はあっても、同一の状態を保とうとする傾向を持つ物質、それが我々の身体を構成する生ある物質である。生命とは、簡単にいえば、ホメオ・スターシスを保とうとする熱力学的に見たオープン・システムの運動体と定義できよう。この場合、時間が経つだけで、生体が内部で極度に变化する。例えば、体温を一定に保つだけでも、生体の成分の一部を燃焼させなければならず、この燃焼によって酸素が消費され、炭酸ガスと水が蓄積される。こうして、時が経つというだけで内部がどんどんと変化していくわけである。ここで新たな成分と酸素の補給、さらには炭酸ガスと水、その他の老廃物の排出がなければ、生体はホメオ・スターシスを保てない。こうした一連の化学変化とそれに伴う運動が止まれば、生体は生きてゆけない。すなわち、生体が生きるためには必然的に内部変化を引き起こさざるを得ず、それを補う

活動がなければ、死滅せざるを得ないという構造を持っているのである。この生体の宿命的構造こそが生物行動の基礎的な原因である。人間の行動も同じことである。我々は人間を行為者としてとらえるが、基本的には以上の観点をふまえている。ただ人間の場合、それ以外の別の要素も考慮に入れなければならない。

6

人間の行為は二つの要素から成り立っている。一つは行為者の価値観の定立であり、他の一つはそれを実現すべき方法論の確立である。価値観と方法論が決定してはじめて人間の目的意識と責任を持った行為が行われるのだ。

ところで、我々の価値観はまた二つの要素から成り立っている。すなわち、価値の内部的要因と外部的要因である。内部的要因とは個人の内部で発生する原因、つまり欲求である。外部的要因とは、社会が我々におしつけてくる価値観、すなわち文化、或は、社会的統制力をもった社会的規範である。我々の価値観はこの二つの要因の力学的構成によって成立している。即ち、我々の価値観はこの二要素のいわば妥協の産物なのである。

7

さて、哲学的問いが投げかけられるのは、行為の必須的要素である価値観がぐらついている場合である。価値観がぐらついている場合は目標が定まらない。つまり、目的意識的な行為はできないのだ。価値観を定立しなければならぬ。このような状況が哲学的問いの発せられる状況である。

では、一体何故価値観が動揺しているのか？ それは、価値観を構成する二要素が矛盾、葛藤しているからである。つまり、個人的欲求と社会的圧力が拮抗しており、互いに決着のつかない状態にあるわけだ。

ここで解決すべき問いはただ一つである。What shall I do? 私は一体何をなすべきなのか？ という問いである。これこそ唯一の哲学的問いである。この一つの問いが変化し、形を変えて、諸々の哲学上の問題を生み出すわけである。哲学的問題はすべてこの問いの変奏曲であ

る。

我々は生体としての構造をもつ以上、身体の内部からくる欲求につき動かされている。しかし他方において、我々は誕生以来ずっと、社会的規範に自己を適応させるという所謂社会化 (socialization) の過程が続いている。幼時においては、内的欲求の方が強く、社会的規範の統制力はまだまだ弱い。年を経るにしたがって社会的規範は個人の中に深く浸透する。こうして個人的欲求と社会的規範が葛藤する状況が現出するのだ。ここで人は迷いの状態、すなわち、どうしてよいのかわからないという状態に陥込む。そうして哲学的問いを發するのである。

この問いを解決すること、即ち内的な葛藤状態に終止符を打ち、価値観を確定すること―それが哲学の課題である。

8

不安、迷い、自信喪失、退屈、倦怠、無気力、無関心、自己疎外：このような問題状況が、哲学的問いの基盤である。問題状況はたしかに一面では否定的な状態だが、他方において、それは真の自己を探求する機縁を与えてくれるという点で、積極的な意味を持っている。我々は問題状況に陥入り、そこを脱することによってはじめて、自覚的な生を手に入れるのだ。逆境に陥入ってはじめて本来的自己を見出すのである。

ヘーゲルの功績は、哲学において、否定や矛盾などが積極的な意味を持っていると考えた点にある。弁証法において、アンチ・テーゼの役割を重視したことである。否定、矛盾、逆境：これらは、進歩発展の一つのモメントである。このモメントを梃子にして、我々は新しい地平に飛躍するのである。ここに挫折や失敗やその他の苦境、すなわち問題状況の意味があるのである。

9

哲学とは我々の無自覚的な通常の世界観を放棄して、新たな世界観を身につけることである。人は通常何らの深い考えもなく、無反省的な生を送っている。毎日毎日、平穏無事な生活を送っているわけだ。これで満足しておれば、それはそれで完結した人生である。それは永遠に哲学とは無関係な幸福な生活といふべきであろう。しかし、何かの拍子にこの通常の世界が破れることがある。そこで、チラッと現実世界が見えるのだ。絶望、不安、退屈、恐怖、孤独、極度の苦痛、病氣、死、戦争、その他様々な耐えがたい体験が我々を襲う。通常的世界観をすて、新た

な世界観を見出すきっかけになるのは、これらの身にしみる体験である。我々は、この極限状況を生き抜くことによって、現実を認識し、本来的な自己に目醒めるのである。

人は通常ねむっている。或は睡眠薬を与えられて、ねむらされている。現実には普通我々の目からは見えない。それは深いベールに包まれているのだ。この世の真実というものはつねに隠されているのである。というのは真実を隠すことが最も効果的な支配の方法なのだから。

10

我々は普通自己を知らない。驚くほど自分というものを知らないのである。本来的自己は我々自身にとって、無意識の闇の底に沈んでねむっている。この、自己が自己自身を喪失した状態が、通常人のあり方である。平凡な、日常的な、依存的な、非自立的なあり方をする者は自己の喪失にすら気づいていない。彼らはただ子羊のように従順に振舞うだけである。ただ命ぜられたとおりの事を遂行するだけである。彼らは慢性的なあきらめの構造の中にいる。骨がらみの敗北主義に染まっているのだ。つまり、彼らの行為を規制しているのは、もはや外の力ではなく、彼ら自身なのである。人は自己を自己自身で規制する。この自己規制の枠組は彼自身にとっての桎梏であると同時に、彼自身を防御する役割も持っている。この枠をはずすこと、この枠組を爆破すること―それが哲学することなのだが―それは非常に勇気のいることである。

哲学には勇気が必要である。この勇気はどこから来るのか？

11

日常的生が破れる瞬間というものが存在する。それは我々の言葉で言えば、問題状況、ヤスパース流に表現すれば極限状況 (Grenzsituation) というべきものである。それは客観的に把握することの不可能な、個人的な、いわば実存的な体験である。我々はこの体験を生き抜き、この体験を深化し、この体験を自覚にまで高めることによって、忘れていた自己を再び出出すのだ。本来的自己を取り戻すのである。

例えば、ニーチェの場合、彼の固有の体験は、突然彼を襲ったヴァグナーとの訣別、耐え難い頭痛、眼痛、吐き気、その他様々な病氣、そして漂泊者となって彷徨う孤独、等々の体験である。彼の書簡集を読み、生涯を辿った者は、たえず彼が苦痛の呼び声を上げているのを目撃する

大いなる肯定の哲学

だろう。彼ほど生涯、病気に苦しめられた思想家は他には見あたらない。その彼がむしろ病気に感謝しているのだ。病気によって彼は「本来の自己を取り戻した」といい、自己の哲学の方法について次のように語るのだ。

「病者の光学からより健康な概念と価値を見わたし、さらにその逆に、豊富な生命の充実と自信から、デカダンス本能のひそかな作業を見おろすこと―これこそわたしのもっとも年季を入れた修業、わたしの本来の経験である。もしわたしが何かの道で達人になったとすれば、この道においてであった。」（「この人を見よ」―なぜ私はこんなに悟っているのか(1)）ニーチェの思想は彼のこの独自の体験から誕生したのである。

あらゆる思想は人間にとって鎧であり、また刀剣である。思想はその人間の自己防衛のための、また攻撃用の武器である。自己正当化、合理化の産物である。それ故、人は自己に身合った思想を求める。丁度、カニが甲羅に合わせて穴をほるように。

或ることを体験するだけではまだ駄目なのだろう。その体験から真の現実をとらえなければならぬのだ。深い体験は真実を語る。しかし、それを聞き取る耳、読み取る眼を持たなければならない。

世界観とは世界の解釈である。いわば、暗号の解読である。恐らく、良い読み方もあれば、悪い読み方もあろう。世界は解釈者に従って、浅くも深くもなる。

個々人の体験は、我々に与えられた世界の象徴、世界についての暗号である。我々はこれを様々な遠近法に従って解釈しているのだ。ここで良い解釈法、良い読み方が必要とされる。それには何が必要か？ ニーチェは言っている。

「誤謬とは…盲目なのではない。誤謬は臆病なのだ。認識におけるすべての成果、すべて前進の一步は、勇氣の結果である。自己に対するきびしさ、自己に対する清潔さの結果である。」（「この人を見よ」序言(3)）

我々が真理に到達するためには、勇氣―即ち、自己への厳しさと清潔さ―を必要とする。ニーチェにいわすれば「あえて冒険すること」が必要なのである。

日常的生から脱するためには、我々は生存の厳しさを知らなければならぬ。現実の深淵をたじろがずに見つめなければならぬ。我々がど

れほどの真理に耐えうるか、それはどれほどまでに自己に誠実であるかにかかっている。勇氣とは自己に対する誠実さである。自己に対する信頼である。自己に対する潔白さである。

自分が本当に心の底から感じたこと、自己の感情、自己の判断を大切にすること、それが自己に対する誠実さである。自分で自分自身をいつわらないこと―これが勇氣である。

ところが、我々は普通、自分自身の感情よりもむしろ、他者の目差し、他者の評価、世論、常識、社会通念…に引きずられている。自己を失い、他者への配慮のもとで生きているのだ。むしろ、真実から目を覆って見ないようにしているのだ。それは習慣になっており、そうしておれば、一応、平隠無事に生活していけると信じているのだ。

皆と同じような服を着、皆と同じような物を食べ、皆と同じように考え、皆と同じように行動する。皆と同じようなことで安心なのである。時の常識によって自己を規制し、一般的な社会通念を無批判的に受入れて行動する。これが通常の人の行き方である。通常人は自己を失っている。自己に忠実であることはそれほど簡単ではないのだ。何故ならば、自己に忠実であることは、世論、常識、社会通念―即ち、他者の意見―と闘うことだからである。皆と同じあり方を止めて、自己の判断に従うことだからである。これは当然他者の意見との衝突を引き起こす。社会的通念、世の一般常識とぶつつからざるを得ない。ここで社会的圧力と自己の内的欲求との相克する状況が現出するのだ。そして、途方にくれた結果、どうすればよいのだ？ という哲学的問いが発せられるのである。それ故、哲学的問いを発している状態は、いわば転回点にあたっている。本来的自己を見出す一歩手前に居るのである。この内的葛藤に結着をつけて、自覚的な、自己本来の生き方を肯定することこそ、哲学の目指している課題である。この哲学の課題を遂行するためには、人は勇氣を持たなければならない。真実を覆い隠すことなく見つめ、それを敢えて口に出す、というだけの勇氣を持たなければならないだろう。

13

日頃、我々の行動を規制している原理は何か？ 社会が我々に押しつけ、我々が自己規制の柱にしている思想とはどのような思想か？ それは、表現はどうあれ、個人の上に社会を置く思想である。個人の欲求よりも共同体の利益を優先する思想である。或は一つの理想、一つのユ―

大いなる肯定の哲学

トピアを描き、その理想の実現が個人の欲求の満足よりも重要であるとする思想である。いずれにしても、これらの思想によって人は自己の内なる欲求を抑圧する。

人間は習慣の動物である。習慣は我々の内に第二の自然を作り出す。社会的圧力のもとで、自己規制を長らく行っていると、自己規制は第二の天性となってしまう。そうして次第に爪を抜かれ、牙を抜かれて、飼い猫のようになってしまうのだ。そうなると人は、自分のふるさと、もともと自分が生れ育った場所即ち広大な大自然を忘れてしまうのだ。飼われているのは窮屈だが、慣れば気楽なものである。こうして人は安逸なる多忙にむなしく時を過すのである。

14

生きることは活動すること、行為することである。行為とは一種の賭けである。賭けにはそれ相応の危険がともなうだろう。この危険を恐れていたのでは、何も得られまい。危険を冒さなければ、貴重なものは決して手に入らないのだ。泳ぎを覚えるためには、人は水に飛び込まなければならぬ。

多くの人は安定を望む。危険を恐れる。臆病にも冒険を憎んだりするのだ。そうして安心して居られる所、多くの人々によって踏みならされた道だけを歩く。何よりも無難を好むのだ。

このような人に哲学は不用である。哲学には厳しい努力と厳しい自己訓練が必要である。哲学には勇気が必要である。およそ、向上心のない人間には哲学は無縁の存在である。平凡な、月並みなあり方、それに満足している人に哲学は必要ではない。より充実した生を求める人だけに哲学は役立つのである。厳しい自己超克の道に敢えて挑戦しようとする者だけに意味があるのである。

世の中の人は努力について誤った考えを持っている。彼らは、努力することは苦痛であり、つらいことだという観念を持っている。そして出来るだけ苦痛を避けようとする。しかし、これは誤りである。たしかに努力には苦痛がともなう。しかし、苦痛のないところに喜びはないのだ。苦痛は喜びの母であり、喜びは苦痛を通してしか生れない。鋭い喜びのあるところにはまた悲痛な叫び声もあるのだ。我々が、自己の目的の達成のためにする努力は、人生の最大の喜びであり、最大の楽しみである。厳しさに耐え、苦痛に耐えて自己が向上していくことの喜びは、

いわゆる気ばらし的遊びの楽しさなど問題にならない位大きいのである。哲学を志す者はこのことを理解しなければならない。教育は、この喜び、即ち厳しい自己超克者だけが感じることのできる喜びを教えなければならない。娯楽的な生ぬるい快樂などに時間を浪費するのは、むしろ可哀想なのだ。哲学は厳しさを必要とする。

15

生命とは、最も一般的に考えれば、太陽エネルギーの一形態である。いま、太陽を一種の原子炉のようなものと仮定すると、そこで核融合反応が起り、莫大な量のエネルギーが放出される。そのエネルギーはやがて地球の表面に到着する。地球では、気温、水温、地温の上昇という形でそのエネルギーを受け取る一方、植物がそれを固定し、利用可能な形態で蓄積する。その植物を動物が食べ、またその動物を他の動物が食べという風に、エネルギーは様々な現象形態をとりつつ、変形、転換されていく。動物はとり込んだエネルギーの一部を燃焼させて活動するわけである。こうして生命全体が一つのシステムを構成しているのである。

このように考えれば、我々はこの果しなきエネルギーの流れの中に発生する一粒の泡、よどみに浮ぶうたかたである。我々に与えられているのは、つかの間の時間だけである。ここに何か意味を見出そうとしても無駄である。人間の生、或は地球上の生はつかの間の火花であり、時がすぎれば、すべては滅び、すべては終る。ただそれだけである。

生きることに目的などない。という意味は、生きることは、他の何らかの目的のための手段では決してない、ということだ。人間は何のために生きるのか？ と問うことは、太陽は何のために燃えているのか？ と問うことに等しい。即ち、両方とも無意味な問いである。そうではなくて、生きることに、それ自体が目的なのである。太陽は核融合反応を起こし、燃えることがその運動形態であり、いわば目的であるように、人間はエネルギーを取り入れ、それを消費して活動すること、即ち生きること、それ自体がその運動形態であり、その目的である。ここに何のためは？ などという問いは不要である。我々は生きるために生きるのだ。

我々はこの世界に投げ出された。いくばくかの時間を生きる可能性を与えられた。生きるべく運命づけられた存在なのである。そのことに意味があるうとなかろうと、ともかく我々は生きなければならぬのだ。生きることを強制されているのだ。何によって？ この宇宙、この大自

然によって生きるように命ぜられているのだ。

生の肯定―これこそ哲学の第一歩である。

16

さて、生きることは第一にエネルギーを取入れることである。先に、生命全体が一つのシステムを構成している、と述べたが、このシステムはいわば力によって構成されているのだ。現実の世界は、エネルギーの様々な現象形態、即ち生物のたえず衝突する生存競争の世界である。この世界においては一つの形態が生き残ることは、他の形態を防げることである。一の生存は、他の生存の否定、少くとも他の支配に結びついている。自己が生きることが、他を否定するという、非情な、殺伐な世界である。我々はこの事実を見まいとし、また忘れることはできても、現実の世界から実際に逃れることはできない。それは生体の宿命的構造から由来する、自然の鉄則なのである。我々はそれに従って生きざるを得ない。また、生きていくということは現実に他の生命の土台のもとに生きていくのである。

人間は、この生存競争に何故勝ったのか？ どのような方法で勝ったのか？ それは明らかに体力によってではない。むき出しの暴力、素手の力によってではない。それは知力によってであり、武器（道具）を作り、それを使う技術によってである。言葉を話し、情報を交換し、共同作業を行うことによってである。これらの事実をはっきり認識すれば、我々は知力を高め、技術を向上させることを第一に考えなければならぬ。

17

知力を高める方法はどのようなものか？ それは、自己を知り、世界を知ることである。まず第一に、本来的自己を知ることである。自己の内なる声に耳をすまして、その声をより大きく、よりはっきりと聞くことである。自分は一体何を欲しているのか？ 本当の赤裸々な自己は何を求めているのか？ これを虚心に眺めることである。他者の視線や評価から離れて、嘘いつわりのない裸の自己と対面することである。汝自身を知れ！ そしてそれに忠実たれ！ これこそ古来から言われてきた哲学の正道である。

本来的自己―生体の宿命的構造により、遺伝により、体質により、幼児よりの環境により形成された本来的自己―に立ち帰るべきなのである。我々は自分自身はよく知っていると思っているが、実はそうではない。自己の中心部分はずねに無意識の暗闇の中である。これを知るのは稀なる瞬間である。それは、いわば悟りの瞬間である。耳を澄ますと声はかすかに、ほんとうにかすかに聞えてくる。このかすかな声をとらえるのだ。それは、次第次第に大きくなってくる。次第に大きく、次第にはっきりと自己の声を聞くのだ。汝自身を知れ！そしてそれに忠実たれ！ それ以外に方法はない。

18

我々は、本来的自己を知り、それを自覚にまで高めて自己の中に内面的欲求を創造する。この自己の中に内面的欲求を確立することが、所謂主体性の確立である。知力を高めるには、主体の確立がなければならない。

本来的自己は、自己の可能性を最大限に發揮することを目指している。生命は自己拡大の欲求、フロイト的に言えば、エロスの欲求を内に秘めている。ニーチェ流に言えば、「力への意志」をその本質とする。

虚心に眺めれば、我々はこの自己の内なる力への意志を否定することはできないだろう。それを否定することは、生を否定することである。生命は自由を欲している。自己の可能性をどこまでも追求し、より強大になり、より自由になり、より多くの事物を支配し、より多くの人と連帯したいと望んでいる。これは決して否定できない厳然たる事実である。この事実こそ現実を左右する原動力である。我々はまず、この事実を素直に受け入れなければならない。それは真実なのだから。

事実から目をそらし、真実を見ないことは、偽善であり、自己欺瞞であり、臆病である。勇気を！ もう少しの勇気を！ 即ち、自己に対するきびしさと潔白さを持たなければならない。勇気をもって、事実をはっきりと認識することこそ、哲学に要求されているのだ。

19

主体性を確立するということは、自己の中に内面的欲求を創り出すことである。内面的欲求は、本来的自己を知ることから、自己の本音を吐

くことから始まる。ここで自己をいつわっても無駄なのである。いつわりの自己からどうして主体性が確立できようか。いつわりの欲求が、どうして内面的欲求に成り得ようか。どうしてそこから自己を燃焼させる努力がでてこようか。我々は、主体性を確立するためには、自己に誠実でなければならぬ。

我々は、正直に自己自身を知れば知るほど、真実を知れば知るほど、そこから生き生きとした欲求が湧き上ってくる。さあ、やろう！ という気持が盛り上ってくる。すべての行為はこの欲求の実現である。行為の前に欲求、即ち願望がなければならぬ。意志があってはじめて行為は成り立つのである。そして、意志が強ければ強いほど、願望が強ければ強いほど、我々は努力するのである。

ここで大切なことが現われる。即ち、意志をより強固にし、願望を強めることである。言い換えれば、本来的自己の願望を内面的欲求にまで高めることである。人間の感情は非常に移ろいやすいものである。外界の変化につれて、次から次へと変っていく。それ故、我々の欲求も次から次へと移っていく。これを自然のまま放置しておけば、それはそれまでである。一つの欲求は時と共に自然に弱まり、消滅してしまう。折角とらえた本来的自己の声も、他の雑音の中に埋もれてしまう。このかすかな声を強めなければならないのである。その声を次第に大きくし、ますますはっきりと、ますます明瞭にし、それが自己の内面的欲求だという程までに育てなければならない。そのためには、精神を統一し、じつと集中して、繰返し繰返し反復して、自己の声を聞かなければならない。この反復繰返しと精神統一によって、本来的自己の声は次第に大きくなるのである。

内面的欲求は我々自身が創り出すのである。まず、我々は普通の状態では無自覚である本来的自己の声を意識に乗せ、精神統一をして、それを繰返し、繰返して自分に言い聞かす。そうするとその願望は次第次第に自我の表面から無意識にまで下りて行って、最後には人格全体にまで浸透する。こうして、我々のいう内面的欲求が創造されるのだ。我々の人格が、意識と無意識の不統一な状態では、行為することから喜びが湧き上ってこない。むしろ、嫌悪感や不満が高まるであろう。意識と無意識が一致し、全人格が一体となったときはじめて、行動する喜び、生きる喜びが感じられるのである。意識的願望と無意識的願望の一致、これこそ内面的欲求の創造であり、主体性の確立である。即ち、哲学的問の解決である。それは、問題状況からの脱出、解脱である。

本来的自己の声は人によって異なる。というのは人によって顔、形がちがうように、その体格、体質、気質、性格、感情、知能、技能、趣味、好み、得意、不得意、その他すべての前提条件が異なるからである。一体、自分は何を求めているのか？ それを冷静に、醒めた目で見つめることである。ここで、どれだけ真面目に、どれだけ真剣になり得るかが問題なのである。そして、たとえ他の人々とその意見が異なろうと、自己のどうしようもない意見、変更不可能な意見を死守すべきである。人と意見の異なるのはいわばあたり前のことである。あらゆる前提条件が違うのだから。その声が本当に自己本来の声であれば、我々はその声に従わねばならない。世界中の人々と意見が異なろうと、自己を死守しなければならない。世間の常識など、いつか誰かによって作られたものである。それはまた新しい常識によってとって変わるのだ。このような常識より、自己を大切にしなければならぬ。自己がぐらぐら動揺しては、すべてが不安定で、不確定なものになる。勇気を出して自己を肯定せよ！

内面的欲求の創造とは個性の発揮である。自己固有の特性をのばしていくことが即ち内面的欲求の確立につながるのである。

現代は情報社会の時代である。我々は毎日おびただしい量の情報にさらされている。テレビ、ラジオ、オーディオ、新聞、週刊誌、月刊誌、季刊誌、単行本、全集、文庫文、辞典、映画、演劇、演芸、講演、講義、その他広告やダイレクトメールなど数限りない情報にとりまかれていく。個人としては、日常会話、座談、対談、電話、手紙、会議、書類、メモ、ノート、カード、ファイル、写真、旅行、その他自己の体験などの情報を所有している。現代は情報過多の時代である。放置しておくとは無制限に雑多な情報が襲いかかる。この多すぎる情報に振り廻されて、多くの人は自己を失うのである。外からの刺激が強すぎて、内なる声が聞えないのである。

内的欲求確立のためには、情報の管理、即ち情報の取捨選択を行わなければならない。自己の無意識界からの声は、静かに耳を澄まさなければ聞えて来ない。外の情報に日々反応していたのでは主体性は確立されないのだ。情報が必要なのは主体性が確立された後である。主体性の確立のためにはむしろ情報を制限しなければならない。

内面的欲求の創造には孤独な時間が必要である。自分一人が自分に対して孤独な時間が必要である。孤独のうちに自己本来の姿を見出すのである。群れから離れ、一人になったときに自己を発見するのである。いつも皆と一緒にいたのでは自己は見出せない。常に外からの情報に接していたのでは、内からの声は聞えない。自己に自分自身がわからない。

孤独な時間を持つことは、精神的に自立することである。精神的な自立のない所に主体性の確立はない。精神的な自立はやがて経済的な自立にまで行くが、主体性の確立のためには少くとも精神的自立がなければならない。両親との精神的な乳離れを完了し、自分自身の足で立ち、自分自身の目で見、自分自身の頭で考えなければならない。真の自立があってはじめてそこから真の連帯が生れる。なぜなら相互依存は真の連帯ではないのだから。自立がなければまた連帯も存在しないのである。

22

社会的規範は我々の生活の共同性から発生する。我々は一人で生きているのではなく、人々と共に生きている。ハイデッガー的にいえば、我々は、世界―内―存在である。常に、道具や他者に囲まれて生きている。

自己に力への意志があると同様、他者にもそれは存在する。これを自然状態のまま放置すれば、ホッブスの言う「万人の万人に対する戦い」の状態となるだろう。力への意志と力への意志はぶつかり合う。その産物として社会的規範が生れ、我々は社会的状態へと移行する。ホッブスの誤りは、万人の万人に対する戦いを終らすために、我々は社会契約を行って社会状態に移行したと想定したところにある。そうではなくて、この万人の万人に対する戦いが実際に行われたのである。そうして勝者と敗者ができ、階級が形成され、職業の分業がはじまったのである。社会的規範はこの戦いの結果の力関係によって成立したのである。

我々は誕生以来、社会の共有する文化を学習し、社会に適応していく。言語、技術、知識、価値観、態度、社会的役割等々を内面化し、社会的規範を自己に取り入れる。こうして我々は社会的存在になっていくのである。この社会化の過程で我々は、時によっては自己の欲求を延期したり断念したりしなければならないことを学ぶ。フロイトのいう現実原則を身につけるのだ。その結果、次第に自己の内的な本能が抑圧される。そして遂に、哲学的問いを発する問題状況に至るのである。それ故、個人の欲求と社会的規範の調和を保つことが重要になってくる。

社会化の過程においては、個人の側からいえば模倣（学習）が、また社会の側からいえば社会的統制（しつけ、教育など）が、重要なファクターとなってくる。子供は通常、両親やその代理者の行為を模倣することによって、社会的規範を内面化する。一方、この模倣のモデルになる人は、彼に模範を示し、賞罰を与えることによって彼を統制する。この二要素がからみ合って我々は自己を社会化していくのである。また、ピアジェのように、社会化の過程に、同輩集団の遊びの役割を重要視する人もいる。遊びの中で子供たちは、一定のルールの遵守、役割分担と役割の遂行といった共同性を育て上げる。これが社会化の過程で大切だというのである。

いずれにしても、我々はたえず自己を社会化している。たえず社会と接触し、自己を社会に適合させ、また逆に、自己に合うように社会を変化させている。この社会化の過程に失敗すれば、所謂逸脱行為が起る。勿論、社会からの逸脱のすべてがマイナス価をもつものではない。すべての新しい現象はいわば逸脱行為である。歴史をふり返れば、獨創性、新しい価値観、新しい真理等は、つねに社会からの逸脱だと見なされてきた。天才、英雄、革命家は、犯罪者と同じく逸脱者である。ともあれ、社会化と逸脱の問題は多数と少数の問題である。それは時代と共に変化する。

我々が言いたいのは、社会的規範を受け入れることと、個人の中の力への意志を確認することとは決して矛盾するものではない、ということだ。社会的規範はこの社会のルールである。野球のルールのようなものである。野球のルールを守ることと、ゲームに勝とうと意欲することは決して矛盾しない。同様に、社会的規範を身につけることと、力への意志の確認とは矛盾しない。むしろ、ルールを正確に理解し、ルールに順応することが、力への意志を実現することである。ヘーゲルは、言っている。自由とは必然性の認識である、と。

闘いは闘いである。この世に生きている限り、生存競争を止めることなど誰にもできない。生きていることは生存競争の真只中にあることなのだ。社会的規範はその闘いのためのルールなのである。そのルールが公正なものか否かは別に、我々はルールに従ってゲームを進めなければならぬ。ルールが不公正だといってルール変更を求めるとも出来よう。しかし、ルールが変わっても、闘いそのものがなくなるわけではない。生きようと欲する意志と意志の衝突がなくなるわけではない。ただ、闘いの規則、闘いの様式が変わるだけである。新たな規則でのゲームが始まるだけである。

しかし、我々が集団を形成することは、そこに新しい要素を発生させる。つまり、集団内において共同作業を行う必要性が生れるのだ。人々は、自然を相手に、また他の集団を相手に、共同して一つの事業を行う。こうして、集団内には、個と個の敵対関係は和げられ、互いの協力関係が新しく生れる。

家族、氏族、部族、職業集団、地域集団、国家とその集団は広がっていく。この集団内で我々は一定の役割を荷ない、人々と協力関係に入る。集団の内部では、個と個の対立は止揚され、共同意識が高められる。人と人との和が賛美され、一体感が強調される。闘いは集団対集団の形になったのである。

サン・テクジュペリは言っている。「愛とは互いに相手を見つめ合うことではなくして、二人で同じ方向を見ることである。」愛によって個と個の対立は最小値にまで低められる。

人間の有限性の自覚もまた、個々の人間の闘争を緩和させる。我々は死すべき存在であり、我々に与えられているのは、短い時間だけである。時は流れ、そして永遠に帰ってこない。我々は一瞬一瞬年をとり、最後にパラリと土塊が落ち、すべてが終るのだ。これが現実である。どのように言いつくろおうとも、変更不可能な現実である。我々には時間の可能性しか与えられていない。

あらゆる知識は過去の記憶に基づいている。我々は自己の体験を覚えていく。言葉によって他者の体験を知ることができる。また文字によって、それらの記憶を保存することができる。我々は、以上のような記憶によって、自然や物事に、繰返しや循環や反復のあることに気付く。そして時の進行の中に現われる繰返しのパターンを知識として取り出すのである。未来の予見はこの知識によってなされる。つまり過去の記憶によってなされるのだ。我々が自己の死すべきことを知っているのもそのためである。過去において人々は次々に生れては死んでいった。何度も何度もこのパターンが繰返された。それ故、我々は自己の有限性を自覚するのである。

生きることは結局与えられた時間を何に使うかということである。先に述べたように、人生には窮局の目的などはない。生きる目的は自分自身が作り出すものである。定まった目的がないという意味で、生きることそのものが遊びである。子供が海辺で砂あそびをしているようなもの

である。砂山ができ波がまたそれを崩す。それを無限に繰返しているのだ。例えば、人生は自作自演の演劇であるともいえよう。舞台は与えられている。また一定のルールも与えられている。その中で、自分で筋を考え、自分が監督し、自分で好きな役割を演ずるのである。また次のようにも考えられる。即ち、人生は様々なゲームの集合である。我々は与えられた時間で、あのゲームをしたり、このゲームをしたりして遊んでいる。ただ、時間がくればすべては終るのである。

自己の有限性の自覚は、我々に瞬間の尊さを教える。大切なのは一瞬一瞬の充実感である。いまの充実感である。どれほど短い時間であろうと、その時を充実して過せば、それは尊い。何故ならば、時は決してもどって来ないから。我々の持ち時間は確実に減っているのだから。

与えられた時間で何をするのか？与えられた時間全部を使って一つのことをするのもよし。また様々な変った体験するのもよし。要するに何をしてもよいのである。ただ、我々人間の行為は、唯一人で行うのではなく、環境の中で、他者と何らかの関わりのもとで行われる。行為は社会性をもつ。それ故、自己の行為には責任がともなう。行為は一種の賭けであるが、賭けには結果がともなう。良い結果もあれば、悪い結果もある。行為の責任とは、もし、その行為により何らかの不利益が出て来た場合、自分でそれを引き受けるということである。他者に迷惑をかけるということである。責任をとらななつてこそ、我々の行為に真剣さが出てくる。責任をとらななつてこそ、行為の賭け性とゲーム性が出て来るのだ。そしてそれであつてこそ、我々は行為に当って真剣に努力するのである。生きる喜びは真剣な努力のないところには生れない。行為に責任を持たないところに、行為の楽しさは生れないのである。

24

しかし、と人は言うであろう。行為は一種の賭けであり、危険をともなうことは認めるが、それでは、一体その行為に失敗すればどうするのだ、と。危険を冒して失敗し、挫折すればどうするのだ、と。我々は傷つくばかりではないか。

しかし、それこそ反省のためのよいチャンスなのだ。挫折したときに、我々は自分というものを、本来の自己というものを、知るのである。

所詮、我々はこの地球上の一時に生れたちっぽけな、弱い存在にすぎない。生命そのものが、エネルギーの巨大な流れの中で引き起された小さな逆流にすぎない。それはいわば宇宙の徒花である。この大宇宙、大自然は、あるがままに存在し、あるがままに動いていく。我々は大